

同志社大学
2012年度 卒業論文

多様なコミュニティに所属することが自我発達に与える影響
——SNSでのコミュニティ形成にネットワーク分析を用いて——

社会学部社会学科
学籍番号：10981098
氏名：長谷川 由利子
指導教員：立木 茂雄
(本文の総字数：21,129字)

要旨

課題：多様なコミュニティに所属することが自我発達に与える影響
——SNS でのコミュニティ形成にネットワーク分析を用いて——

学籍番号 19091098

氏名 長谷川 由利子

情報通信技術の発達により、われわれは電子メール、Web、Wikipedia、SNS(Social Network Service)などの CMC(Computer-Mediated Communication)というコンピュータを活用したコミュニケーションを日常生活で行うようになった。

従来ではインターネット上でのコミュニケーションと対面型のコミュニケーションの違いについて多く研究がなされてきた。それは CMC と対面型のコミュニケーションでは声やボディランゲージの面で情報量の違いが多くみられたためであったが、現代では技術の発達からこのような差もなくなってきている。また、ジメルやミードが多様なコミュニティを多く持つ人ほど、自我が発達していることを述べている。CMC の中でも SNS は自由なコミュニティ形成が可能なサービスであることから、SNS で個人が持つコミュニティが多様であれば自我が発達しているのではないかと考えた。

このことを明らかにするため、安田雪のネットワーク分析と立木・栗本の自我同一性尺度を用いてコミュニティ形成と自我発達の相関性を調査した。調査は調査紙により行っており、分析の結果として、コミュニティのネットワーク形成に偏りがある人ほど自我発達する傾向があることが明らかになった。

キーワード：自我、SNS、ネットワーク分析

目次

はじめに	1
1 先行研究	1
1.1 社会的経験を通して発達する自我	
1.2 多様な社会圏	
1.3 ジョハリの窓からみる自己形成のプロセス	
1.4 消費社会の変化による自己形成への影響	
1.5 従来 of CMC 研究	
1.6 自由なコミュニティ形成を促進する SNS	
1.7 ネットワークによる個人の分析	
2 問題提起	15
3 調査方法	15
3.1 調査対象者・時期	
3.2 調査対象者の属性	
3.3 調査内容	
3.4 ネットワーク分析	
4 調査結果と考察	18
5 おわりに	21

参考文献

参考 URL

はじめに

現代においてコンピュータや携帯電話などの端末は広く普及しており、今やこれらの機器無しでは、われわれの暮らしは成り立たなくなっているといえよう。筆者自身、日頃からインターネットを通じて様々な人とやりとりすることが生活の大きな要素のひとつとなっている。筆者がインターネットを利用して人と交流をはじめたのは小学生の頃である。周りにもパソコンを持つ友人は多く、中には携帯電話を持つ者もいた。インターネットでの友人との交流では電子メールでのやりとりも勿論あったが、個人が持つホームページや掲示板などの Web サービスを通じてのやりとりが主であった。それぞれが自分のアドレスを持ちサイトの装飾を、まるで自分の部屋のようにして自分の考えや思いを投稿し交流し合っていた。それはわれわれにとってコミュニケーションのひとつであり一種の遊びであったと感じる。現在はもう友人どうしてサイトを持つことは無くなったが、代わりに SNS に参加することで当時の交流を続けている。このようにインターネットでは時間や場所を超えてつながり続けることが可能であり、自発的な交流をしなくても関係を持ち続けることができる。このことから、筆者は対面型のコミュニケーションとは違った人と繋がる感覚を SNS で感じていた。

大学生になり、色々な人と交流する機会も増えたことから自分のことについて話す機会も増えた。今まで話すことが無かった事柄について友人に語るとき、これまでにない自分の成長と充実感を感じることができた。その時まで筆者はインターネットで他人と繋がることに安心感を抱いていたが、このような充実感を得ることはなかったと思う。その時まで対面型でコミュニケーションすることとインターネットで交流することの、交流の方法の違いによって自分が受ける影響も変わると考えていたが、実際に人と深く関わったことから得た充実感から、交流の形ではなく交流に対する個人の姿勢が自己の成長に大きく関わるのではないかと考えた。以上のことから、筆者は個人の対人関係に対する姿勢が自己形成にどのように影響していくかということ卒業論文で研究することに決めた。次に自我や個性の発達はどうのようになされるかについて、そしてインターネットでのコミュニケーションに関する研究について述べていく。

1 先行研究

1.1 社会的経験を通して発達する自我

わたしたちは一人ひとりが他人とは違う自己意識を持っている。「精神および自我は、本質的に社会的産物、すなわち、人間の経験の社会的側面から生まれる産物、あるいは現象」(Mead.G.H 1934=1973:2)とあるように、この自己意識は、社会的産物であり人間の経験の中でも社会的な面から生まれるものであるとミード(1934=1973)は述べている。つまり社会に参加し、社会的な経験を獲得することでわたしたちは自我の芽生えを経験し、自己意識を持つようになるのである。

ここでの社会的な経験を得るというプロセスは、他人の態度を採用するところから始まる。例えば旅行をするというプロセスには次のような反応が起きているとミードは述べている。

たとえばもしわれわれが旅行にでようときめると、相互に関係した習慣の組織体があって、それがはたらきはじめる一筋に荷物をつめる、汽車の切符を買う、使う金を銀行からひきだす、旅行中によむ本をそろえる等々。人が旅行にでようと決心するとき、このような組織化された諸反応の系列があり、それが反応相互の適当な関係もちつつ、ただちに機能しはじめる。一人が実際にもっている知能をはたらかせるためには、われわれの習慣のなかにこのような反応の組織体がなければならない。(Mead 1934=1973:136)

つまり一般的な社会システムにのっとった経験をすることで、その社会の態度や意識を獲得するのである。旅行をするとなった時に起こさなければならない行動は既に社会に存在する組織化されたシステムであり、旅行すること自体が社会への参加と経験になる。この経験を通して、個人は他人の態度を取り入れ自我を発達させているのである。

また、ミードは個人の十分な自我発達には単に他人の態度を取り入れることや、そのような社会過程の全体でのある観点からの態度を個人経験に持ち込んだだけでは不十分であると述べており、この事をミードは幼児の遊戯とゲームの違いを説明することで明らかにしている(1934=1973)。幼児は遊びの中で他人の態度に対して刺激を受け反応する。その一連の行為は気まぐれであり基本的な規則がない。しかしゲームの場合には規則があり論理があり目標がある。参加する子供はそのゲームに参加する他のすべての子供の態度をやつてのける準備が出来ている必要がある。さらに、子供たちはそれぞれの与えられた違う役割を互いにハッキリ関係づけていなければならない。ゲームでは他人たちの反応がみごとに組織立てられているので誰かのある態度がそれに見合った他人の態度を呼び起こすこととなるのである。このゲームへの参加はそのまま社会への参加として理解することができる。このように個人が所属する社会のメンバーとして、その社会の人々が従事する共通の社会活動でのさまざまな局面に対する人々の態度を取り入れ、その社会集団全体がもつ個人的な態度を一般化することではじめて所属する社会の態度を取り入れたことになるのである。この社会の態度というのは〈一般化された他者〉であり、獲得することで自我の発達を十分なものにするとミードは述べている(1934=1973)。

この〈一般化された他者〉を受け入れるプロセスには〈一般化された他者〉の態度を個人の中で組織化し組み合わせた〈me〉と、態度への反応である〈I〉の相互作用が行われている。ミードは以下のように述べている。

「I」とは、他者の態度にたいする生物体の反応であり、「me」とは、他者の態度(と生物体自身が想定しているもの)の組織化されたセットである。他者の態度が組織化された「me」を構成し、人はその「me」にたいして「I」として感応する。(Mead 1934=1973:187)

つまり、他人とのコミュニケーションには常にこの〈me〉に〈I〉が反応しており、このような相互作用を繰り返すことで自我は発達するのである。

1.2 多様な社会圏

旅行をすることと同様に、わたしたちは家庭や学校・職場など多種多様な社会に参加し

ている。所属する社会が違えば個人が受ける影響も変化するが、社会との繋がり方の違いも個人に大きな影響を与える。集団に所属することについて、ジョージ・ジンメルは未開時代において個人が罪を犯したときに、罪を犯した本人だけでなくその個人の一族や三世代、四世代にまで罪の責任が科せられていたことから「個人に必要な援助のすべてを彼に提供する集団が小さければ小さいほど、そして個人が生存の可能性をまさにこの集団の外部で見いだすことが少なければ少ないほど、個人はますますその集団に融合しなければならない」(1890=1998:25-26)と述べている。つまり、個人が所属する社会集団への依存が強ければ強いほど連帯意識の概念は生まれやすくなるのである。一方、所属する社会のコミュニティを拡大すると個人は自由になる。ジンメルは次のように述べている。

きわめて大きな集団は個人主義の極端な育成や誤った育成、厭人的な孤立や異様で気まぐれな生活様式や、さらにひどい我欲により広い余地をあたえる。してみればこのことはそれでも、狭い集団よりは広い集団のほうがわれわれに要求するところもまたより少なく、個人に配慮するところもより少なく、そのためきわめて倒錯した衝動が完全に発達するのを妨げることもより少ないということの結果であるにすぎない。それゆえ圏の大きさはたんに消極的な責任を負うにすぎず、より重要となるのは集団の内部よりも外部の発展であり、そして小さな集団よりも大きな集団のほうが、その成員に外部の発展への可能性をより多くあたえる。(George Simmel 1890=1998:57)

コミュニティを拡大することで集団への依存が弱くなることから個人は先に述べたような何世代に渡って罪を背負うなどの集団における連帯責任の負担から逃れることができる。さらに集団からの自立は個性の発達を促し、お互いの個性を尊重し合う個人主義を生むことになる。このように所属する社会集団が大きくその社会集団との結びつきが緩やかであることが、個性の発達を生むのである。ジンメルはさらに、自らの関心によって自由にコミュニティを形成する学者の社会圏について次のように述べている。

ひとつの最高の例は「学者の共和国」である。これは国籍や個人的な特殊な関心や社会的な地位などに関しては普通はきわめてさまざまな集団に属しながら、認識一般のような最高の普遍的な目標で一致するすべての人びとの、半ばは観念的で半ばは現実的な統合である。ルネサンス時代においては精神のおよび教養的な関心の力が、現代よりもより強くより特徴的に示され、きわめて事なつた所見から共属するものを分化させて、ひとつの新しい共同社会へと統合した。人文主義的な関心は圏や身分の中世的な隔離をうちやぶり、きわめてさまざまな由来の出身であり、なおきわめてさまざまな職業にいそしんでいた人びとに、思考や認識への積極的あるいは消極的な共通の参加を与えた。この共通な参加はそれまでの生活の諸形式と諸区分とは多様な仕方

で交差する。(Simmel 1890=1998:111)

このような自由なコミュニティ形成は、人々に多様なつながりをもたらしている。そして、自由に所属する社会を選択することは多様な社会を数多く持つことを可能にする。このことについてジンメルは「多様な性質を所有するのと同数だけの理念に関与し、そうすることによってその個性的な規定性を獲得する。人格とそれが属している圏との関係につ

いても事情はまったく同じである。」(1890=1998:113)とも述べている。つまり、多様な社会に所属することは個性の発達をより大きなものにするのである。

さらにこの多様な社会という点において、多少なりとも闘争状態にある社会であることが自我発達にさらなる影響を与える。ミードは次のように述べている。

高度に発展して組織化された人類社会とは、その個人メンバーたちが縦横無尽さまさまに複雑なやり方で相互に関係づけられていて、その結果かれらみんながその社会の改善については多数の共通の社会的関心を分けあい、それと同時にいっぽうでは自分たちが各自個人的にだけ抱いている、あるいは小さい限定された集団内だけでたがいに分かち合っている、そういう数多くの別の関心をめぐっては多少とも闘争状態にある社会である。高度に発展し組織化された人類社会の個人間における闘争は、かれら独自の本源的衝動間の闘争というにとどまらず、かれら独自の自我なり人格なりのあいだの闘争である。そのめいめいが——高度に複雑で組織化されていた統合された——それぞれ明確な社会的構造をもち、多数のさまざまな社会的な面や局面をもち、それを構成している社会的態度の多数のさまざまなセットをもっている。こうして、こういう社会内では、闘争は、さまざまな個人の自我のあいだでばかりでなく、同じ個人の自我がもつさまざまな面なり局面なりのあいだでもおこる。(Mead 1934=1973:321)

ジンメルも対立するコミュニティに所属する個人について、「個人が競争と結合との関係が大きく変化する多様な圏に所属していることによって、個性化の組み合わせの無限の可能性があらわれる。」(1890=1998:115)と述べており、このように多少の闘争状態にある社会圏に所属することは自我や個性の発達に大きな影響を与えることがわかる。以上から自由にコミュニティ形成を行える環境であること、また複数コミュニティを持つ場合は各々のコミュニティに多少の闘争関係があることが自我の発達を促すというのがミードとジンメルの主張である。

1.3 ジョハリの窓からみる自己形成のプロセス

〈ジョハリの窓〉とは対人関係のプロセスを図解するモデルであり、1995年にサンフランシスコ州立大学の臨床心理学者ジョーゼフ・ラフトと、U.C.L.A.のハリー・インガムが発案したものである(柳原光 1992)。この図式は図1のように「私に——わかっている(known、知られている)または、わかっていない(un-known、知られていない)」という縦軸と、「他人に——わかっている、または、わかっていない」という横軸によって作られるマトリックスである。個人が対人関係に入る時、〈私〉には1)開放の領域、2)盲点の領域、3)隠している領域、4)未知の領域の4つの領域がある。

まず、1)開放の領域とは私にも他人にもわかっている私である。つまり、私についての情報が他人と共有されており、〈公の私〉〈解放された領域〉防衛する必要もない〈自由に活動のできる領域〉といえる。この領域の情報としては、相手と共有している自分の感情、態度、観察できる行動が含まれる。2)盲点の領域とは私にはわからないが他人からは見えている自己の領域である。たとえば、自分ではまったく気付いていない癖や行動から、相手は私についての直接的または推論的な情報を得るが、私はそのことについては知らない

状態のことである。私自身の在り方で他人にしか見えていない部分の情報は、他人しかもっていない。またこのような領域の存在を認めるには勇気が必要であり、この領域を認識することは自己を深めるきっかけとなる。3)隠している領域とは、私にはわかっているが他人にはわからない領域である。私としては避けて通りたいので、他人には知らせたくないと思い隠している部分である。この領域には、隠された課題、触れたくない事柄などがあり、隠されているためにミスコミュニケーションの原因にもなる。最後に4)未知の領域とは、私にも他の人たちにもわかっている私の領域である。無意識の動機、ニーズ、不安などがあるが、むしろ埋もれた過去の経験の蓄積や、いまだ知られざる自分の潜在的な能力の発見が起こる場でもある。

	私にわかっている	私にわかっていない
他人にわかっている	I 開放	II 盲点
他人にわかっていない	III 隠している または 隠れている	IV 未知

図1 ジョハリの窓

(出典) 柳原光(1992)をもとに作成

そして、このモデルは単に4つの窓があるのだという指摘にとどまらず、これらの領域に起こる変化を動的に説明することができる。その変化とは、1)開放の領域が広がり 2)盲点の領域 3)隠している領域が狭まることにより、4)未知の領域に発見が起こるというプロセスである。このプロセスによって、私たちは自他をよりよく知り、信頼関係が深まり、共同してより効果的に課題を達成することができるようになる。

この変革過程では図2のように、1)開放の領域が、2)盲点の領域に広がる働きとしてのフィードバックと、3)隠している領域への拡がりの働きとしての自己開示のプロセスが不可欠である。自己開示とは、自分にはわかっているが、相手には隠している(隠れている)領域の情報を相手に提供することである。私の考え、意見、感情、動機、欲求、自己概念など、自分についての知識を相手に率直にあるがままに伝えることによって、1)の領域が3)の領域へと拡大し、開放の領域が大きくなる。自己開示が相互におこなわれるようになると、防衛機制も減少し、自由、安全の雰囲気醸成され、信頼関係は深まる。また、勇気を出して自分を他者に知らせるという行為は、正当な自身の強化につながり、自己の主

体性の確立のためにも必要な行為である。

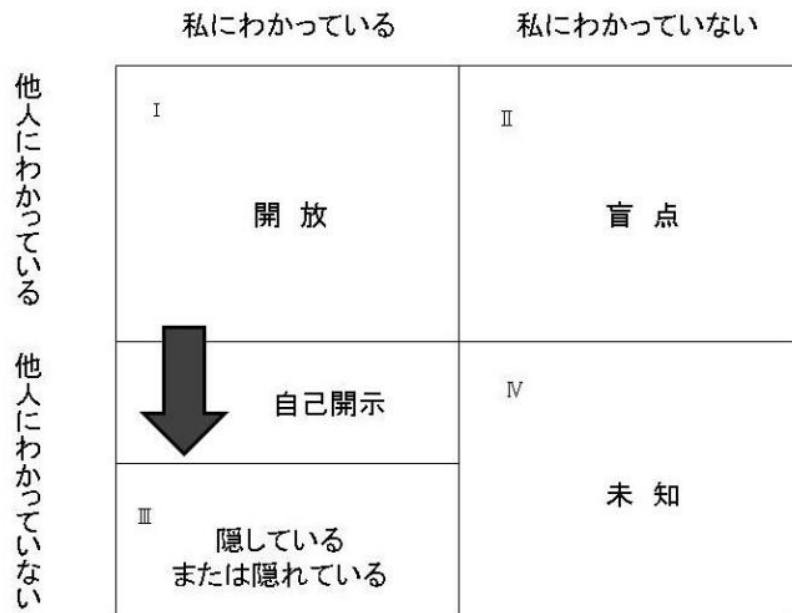


図2 「ジョハリの窓」から見た自己開示

(出典) 柳原光(1992)をもとに作成

次にフィードバックとは、私にはわかっていない私について他の人から知らせてもらう働きである。私の行動は相手にさまざまな影響を与えるが、そのすべてを知ることはできない。そこで、相手にしかわかっていない私を他の人から知らせてもらう必要がある。

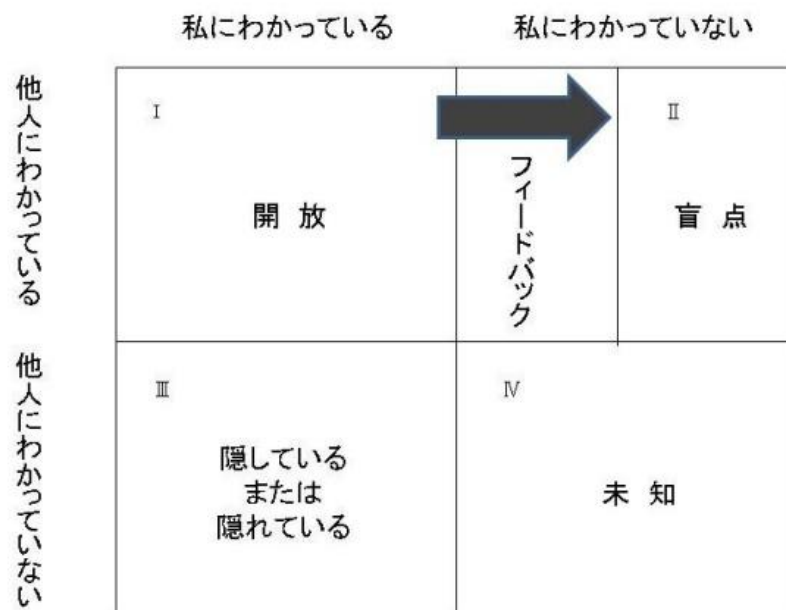


図3 「ジョハリの窓」から見たフィードバック

(出典) 柳原光(1992)をもとに作成

たとえば、貧乏ゆすりをするという私の癖が、相手をいらいらさせても、貧乏ゆすりをしている本人は自分がそうしていることさえ知らない。まして相手をいらいらさせていることなどわかるはずがない。しかし、一旦「君の貧乏ゆすりは僕をいらいらさせる」という情報を与えてくれれば、図3のように、私は自分の盲点に気付くことができる。フィードバックによって、盲点の領域は狭めることができる。フィードバックについて留意すべきことは、フィードバックが情報提供であり相手を非難したり攻撃することではないという点である。相手が、その情報を受容する状況にあるとみえるとき、できるだけ具体的、記述的、没評価的な情報提供をするべきである。また、相手の短所の指摘だけではなく相手が自分でわかっていないと思われる長所について指摘することもフィードバックである。

以上のような、自己開示とフィードバックの働きによって1)開放の領域が下へ、また右へと拡大されると4)未知の領域にも変化が起こり、潜在していた能力などが1)開放の領域に出てくることになる。

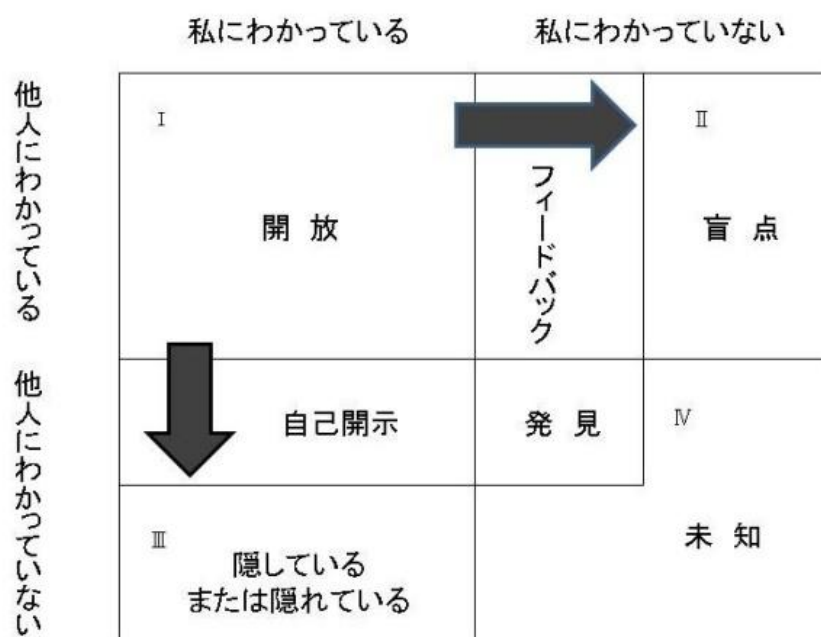


図4 未知の領域での発見

(出典) 柳原光(1992)をもとに作成

このように今までは、誰にもわからなかった能力が〈自己開示〉や〈フィードバック〉の相互作用を通して、自由闊達な雰囲気の中で発揮されるようになり創造性が生まれることになる。今までにはなかった創造的な思考と言われるものでも、まったくの無から出てくるのではなく、埋もれてしまった過去の経験が突然思いがけずよみがえったり、何かの拍子に潜在能力が触発されることもある。「私にはこんな潜在能力が有ります」と言ってしまうえばそれはすでに潜在能力であるとは言えず、このプロセスを通して獲得するまでは正にまったくの未知の領域なのである。柳原は次のようにも述べている。

現代のような「管理されている社会」は、各個人の能力が存分に発揮できる状況に

はないといわれています。私たち一人ひとりにはまだまだ「知られていない」潜在能力があるのだと推測できます。活発な、開放された場での、率直な自己開示やフィードバックの働きを通して、潜在能力なり、今まではまったく気付かなかった私を発見し、創造性を発揮できるようになります。「ジョハリの窓」が示す対人関係の変革過程は、一人ひとりの成長のみならず、グループ、組織、社会の変革過程を理解するための示唆をも与えています。(柳原光 1992:68-69)

このことから、〈ジョハリの窓〉の対人関係モデルを理解し実行することは、個人の成長のみならず社会の発展にもつながると考えられる。

1.4 消費社会の変化による自己形成への影響

情報通信技術の発達とともに、自己形成の社会的な意識も変わってきている。富田英典は消費社会の高度化から社会に求められる個性、アイデンティティが変容してきていると述べている(2009)。消費社会の高度化とは、商品の多機能化とその商品を所有することの目的の変化である。最初モノは消費されるための何らかの単純な目的があって所有されていた。しかし社会が豊かになり、収集家によって集められた敷物やテーブルのように、所有することでその目的が果たされるようになった。そして現代ではモノはメタ機能化されている。例えば、皿に触らないでも汚れを落とせる超音波皿洗い機や九段階で焼けるトースターなどである。このように消費社会の変容は「機能的段階」「非機能的段階」「メタ機能＝非機能的段階」に分けられ、1980年代以降の日本の消費社会は第三段階に突入してきたと富田は述べている(2009)。また「どんなに要求の多い女性でも、メルセデス・ベンツがあれば個人的な好みと欲望をきつと満足させられるに違いありません！…本当に自然なレンタルのヘア・カラーを使うようになってから、(中略)今までよりずっと本当の私になったのです。」(2009:13)という広告が掲げられるように、絶対価値としての「個性」などは機能的な世界から放り出されてしまい、もはや存在しない個性が今また「個性化」されようとしている。さらに「最小限差異」によって生まれる「本当の自分」を夢見ることを「個性化されたナルシズム」あるいは「管理されたナルシズム」と呼んでいる(2009)。以下のようにも富田は述べている。

それは「自分で自分を個性化する」ことであり、「個性化する自分」と「個性化される自分」、つまり「本当の自分」と「本当の自分でない自分」の両方を一度に設定しなければならぬ「自己言及のパラドクス」そのものである。(富田英典 2009:14)

さらに、次のようにも述べている。

ナルシスティックな現代人にとって、日常生活は危険に満ちている。そこで、ジョークや皮肉な態度によって、あらゆる場面で他者から「距離」をとろうとする。そして、自分の人生のイベントの数々を誰か他人の身の上に起こっているかのように自分自身を観察する方法、ロール・プレイング、「保護擬態」(その場の環境に合わせて保護色を変えること)、ユーモア、自分自身のパロディ化など、様々なサバイバル・ストラテジーがとられる。つまり、「無限に順応でき、取り替えもきくアイデンティティ」

が必要なのである。「確固たるアイデンティティ」は、順応性の限界の名残であり、「限界があること」は攻撃されやすい弱点がある。(富田 2009:15)

このように消費文化が変化することで人々のナルシズムは助長されてきた。そして第二次世界大戦後、豊かさや変化の時代を当然のことであると考えようになった点と、職場における柔軟性の要求が強まったことから、変化に適応でき革新的で無秩序やあいまいさにも平然と対応できる者が求められていることが現代に至るまでのナルシズムと「変易的アイデンティティ」を開花させる原因であったとも富田は述べている。

ギデنزが現代では平等な男女の関係、「ひとつに融け合う愛情」が特徴であると述べていることも富田は紹介している。前近代ヨーロッパでは婚姻が経済的事情から行われていたが、愛情と性的愛着が結びつき「情熱恋愛」が行われるようになった。これは社会秩序にとって危険なものとして認識されていたが、18世紀後半以降になると愛情とセクシュアリティは結びつき「ロマンティック・ラブ」が重視されるようになった。しかし女性のセクシュアリティは家庭に存在し、男性の社会的役割は仕事として役割が限定されるようになった。後に近代的非人方法と新たな生殖技術の普及により、生殖と言う必要性からセクシュアリティが解放されることになる。結果、セクシュアリティは個人のパーソナリティ特性として形成されるようになった。このように、自己と本質的に結びつくようになったセクシュアリティのことをギデنزは「自由に塑形できるセクシュアリティ」と呼んでいる(1992=1995)。また、このことは女性が家庭生活に隷属させられていた状態に影響を与えた。女性の社会進出は男女の関係をより平等なものへと変化させ、対等な条件の下で感情のやり取りを行う「ひとつに融け合う愛情」が現代の男女の関係において特徴的となってきているとも紹介している(Giddens 1992=1995)。また、その関係性を「純粋な関係性」と呼んでいる。

「純粋な関係性」においてギデنزは1)いつどの時点においてもいずれか一方のほぼ思うままに関係を終わらすことができる、2)相手に対する自己投入を中心に展開、3)無条件で相手に自己投入するので、かりに関係が解消した場合精神的打撃と言うリスクを負うことになる、4)緊張や葛藤を生じる場合がある、という特徴を上げている。また、親密な関係性では私たちはふだん世間にさらすはずのない感情や行いを相手に開示しているとも述べている(Giddens 1992=1995)。ギデنزは、次のように述べている。

純粋な関係性は、相手にたいする自己投入を中心に展開するため、ハイトの研究で回答を寄せた多くの女性たちが認めているように、構造的矛盾を内包している。自己投入を生みだし、共有の歴史をつくり出すためには、一人ひとりが相手のために尽くしていく必要がある。つまり、その女性は、二人の関係性が無期限に維持できる、いわば保証のようなものを、言葉や行いで相手に与えなければならないのである。しかしながら、今日の関係性は、かつて婚姻関係がそうであったように、ある極端な状況を除けば、関係の持続が当然視できる「おのずと生じていく状態」ではない。純粋な関係性の示す特徴のひとつは、いつの時点においてもいずれか一方のほぼ思うままに関係を終わらすことができる点にある。関係性を十分長続きさせるためには、自己投入が必要である。しかしながら、無条件で相手に自己投入していく人は誰もみな、かりに万一関係が解消した場合に、将来きわめて大きな精神的打撃というリスクを冒す

ことになるのである。(Giddens 1992=1995:204-205)

「純粋な関係性」においては「かりに関係が解消した場合精神的打撃というリスクを負うことになる」ということから、関係を築く中で個人のアイデンティティが攻撃される可能性が十分あるということである。また、「純粋な関係性」における信頼感は外部からの支えが無いことから、親密な交わりをもとに信頼を育む必要がある。ギデنزは次のようにも述べている。

純粋な関係性では、信頼感は外部からの支えをまったく欠いているため、人びとは、親密な交わりをもとに信頼を育んでいく必要がある。信頼とは、相手の人間を信用するだけでなく、相互のきずなが、将来生じる精神的打撃に耐えうる力をもつ点を信用していくことでもある。このことは、たとえ信義それ自体がさまざまな問題をはらんでいるにしても、たんに信義だけでなく、それ自害のことがらが関係しているのである。相手を信頼することはまた、相手の真に誠実に振る舞うことができる能力に、一か八か賭けることでもある。(Giddens 1992=1995:206)

このように、ここでの信頼とは相手の人間を信用するだけでなく、相互のきずなが、将来生じる精神的打撃に耐えうる力をもつ点を信用していくことと規定している。このギデنزの主張から、富田は現代の人々が、社会からは取り替えの効くアイデンティティを求められ、そしてそれに応えようとしている一方で、親密な関係を持つとする相手には在りのままの自己を開示し、相手から理解され受け入れられることを望むという大きな矛盾を抱えていること述べている。また、その関係性は対等なものではなくてはならない。このことは、次にギデنزが述べていることからわかる。

自己のアイデンティティの流動性は、純粋な関係性が要求することがらを必ずしも受け入れることができるわけではない。信頼感は、相手が追い求めるいろいろな展開の軌道にともかくも順応していかなければならない。信頼には、つねにある程度の放縦さが必要なのである。誰かを信頼することは、その人たちを監視したり、その人たちの活動を特定の型枠のなかに押し込むのを、たとえその機会があっても差し控えることを意味している。しかし、人は、他者にたいして認められる自立性を、相手が関係性のなかでいだけく要求を充たすようなかたちで活用するわけでは必ずしもない。人は「それぞれ別々に成長していく」——このことは、至極当然な所見なのである。しかしながらも、もっと微妙な影響力がかかわっている可能性がある。たとえば、自己の叙述に生ずる変化は、いかほどそうした変化が生じたとしても、例によって関係性における権力の配分に影響を及ぼし、また、権力の配分を共依存的な方向に押しやる可能性がある。(Giddens 1992=1995:208-209)

このように流動的なアイデンティティを持つ場合、自立性をもった関係が求められるのである。

1.5 従来の CMC 研究

従来 CMC では対面コミュニケーションと比較して、会話者同士の表情や身振り、手振り、声などの非言語的手がかりが少ないという特徴が注目されてきた。この点に注目し、CMC と自己呈示について杉谷陽子は以下のように述べている。

対面コミュニケーションでは、自分がこうありたいと思うとおりの自己呈示をしても、コントロールし切れなかった非言語的手がかりからそれが虚偽だとばれてしまう可能性が高い。しかし CMC ではそのような可能性が低い。(杉谷陽子 2007:235)

また、次のようにも述べている。

例えば対面コミュニケーションでは、会話の際、発言内容を考えながら自分の身ぶり・手振りや表情、相手の反応などに気を配らなければならない。一度に多くの対象に注意を払わなくてはならない対面コミュニケーションは、認知的な負荷が高い。一方で、例えばメールを書く場合を考えると、非言語的手がかりはほとんど相手に伝達されないため、自分の発言内容だけに集中することができる。つまり CMC は認知的な負荷が低いメディアだと考えることができるだろう。(杉谷 2007:235)

このように杉谷は対面型のコミュニケーションと比べて情報通信技術によるコミュニケーションでは自己の呈示がしやすく、また相手にも受け入れられやすいと主張している(杉谷 2007)。更にその公開は必ずしも特定の相手に向けて発信されたものである必要はない。使用するサービスやその方法によって誰に、また、どれだけの人数に発信するかは個人の選択が可能である。山本修一郎は送り手と受け手の数でコミュニケーションの方向を次の四つに分類している(山本 2010)。1)1:1 型は送り手と受け手が 1 対 1 でコミュニケーションする。例として電子メールなどがあげられる。2)1:N 型は 1 人の送り手が N 人の受け手に発信するコミュニケーションである。例として電子メールのメーリングリストやブログがある。3)N:1 型は N 人の送り手が 1 人の受け手に対して発信するコミュニケーションであり同じ情報を共有して編集するコミュニケーションである。例として Wikipedia などのコンテンツマネジメントシステムがあげられる。4)N:N 型は N 人が相互にメッセージをやり取りできるコミュニケーションである。参加者が対等に情報を送受信でき、例としては SNS があげられる。このようにどこまで個人情報公開するかと加えて、自己開示する相手についてもそれぞれに選択が可能となっている。

杉本の研究がなされた 2007 年から情報通信技術の環境は大きく変化してきている。中でも大きな変化は、情報技術の発達により動画による通信が可能になったことや、リアルタイム性の高いやりとりが可能になったこと、現実空間をバーチャルにする技術である拡張現実感が発達してきたことがあげられる。以上のことから、情報通信技術によるコミュニケーションが個人に与える影響は単に非言語的手がかりが少ないということだけに留まらないことが考えられる。

また土橋臣吾(2007)は、インターネットが生まれ家庭に浸透するまでの間にインターネットに対するユーザーの姿勢が変わってきたことを述べている。当初、インターネットが家庭でも使えるようになった時代にはそれまでの常識では扱うことのできないインターネ

ットに対して、一般消費者はある種の不安を抱いていた。それはインターネットのメディアとしての「新しさ＝わけのわからなさ」に対するある種の不安や拒否感であり、そういった気持ちからインターネットと距離をとることで徐々にインターネットに親しんでいったと述べている。そして、技術の発達やソフト開発によってビジネスの利用のみならず個人が私的な理由や目的でインターネットを扱うことが可能になった。インターネット上での表現や活動について、次のように述べられている。

重要なのは、こうしたイメージにおけるさまざまな表現活動は、これまでいわれてきた「個人の情報発信」とはやや異なるという点である。周知のように、「個人の情報発信」というとき、その典型として考えられてきたのは、個人のホームページの制作であり、調査の多くも、まさにそれを「個人の情報発信」の指標としてきた。(土橋巨吾 2007:176)

例をあげれば、Wikipedia への執筆があげられる。この活動はそれまでの個人ホームページ作成のように確固たる〈作者〉として行うものではない。インターネットで個人が情報発信することは必ずしも個人の強い意図を前提とした表現活動であるとは言えないのである。また、このような活動が広まるなかで〈放電コミュニケーション〉という概念が生まれたことも述べられている。この言葉は SNS やブログの観察から博報堂生活総合研究所が導き出した言葉であると述べられている。そこでは、SNS やブログが「日常のちょっとした発見や感動」を広く伝える場になっていることから、ウェブ上での表現活動が情報発信というより、自然にあふれでる〈放電〉に近いものになっているとされている。また、このような活動は「思いついたときに(非同期)」、「何気なく(非意図)」、「形式にこだわらず(非定型)」になされる表現活動である。このような傾向は、現代の SNS において更に顕著なものになっていると言えるだろう。特に、Twitter の〈つぶやく〉という機能は「思いついたときに(非同期)」、「何気なく(非意図)」、「形式にこだわらず(非定型)」という〈放電コミュニケーション〉を助長するものであると考えられると土橋は述べている(土橋 2007)。

1.6 自由なコミュニティ形成を促進する SNS

SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)とは、株式会社インセプトによる IT 用語辞典によれば人と人とのコミュニケーションを促進・サポートする Web サービスである(2012)。ここでは SNS は友人・知人間のコミュニケーションを円滑にする手段や場を提供し、趣味や住んでいる場所の共通点、あるいは「友人の友人」といった繋がりを通じて新たな人間関係を構築する場を提供すると述べられている。このことから、従来の Web サービスと比較して、先に述べたような「自らの関心に応じて自由なコミュニティ形成をする」という環境を提供するサービスと言えるだろう。

SNS の利用者は近年のスマートフォン普及により大きく増加していることが、株式会社マイナビ就職情報事業本部による「2013 年卒マイナビ大学生のライフスタイル調査(携帯・スマートフォン・SNS 等の利用状況について)」から読み取ることができる。調査期間は 2011 年 12 月 26 日～2012 年 1 月 15 日であり、対象は 2013 年 3 月卒業見込みの全国大学 3 年生、大学院 1 年生である。調査はマイナビ全会員にハイブリッド DM(WEB DM)を配信し、その後定期的に新規登録会員にハイブリッド DM(WEB DM)を配信して行われた。有

効回答数は 6,123 名(内訳は文系男子が 1,086 名、理系男子が 780 名、文系女子が 3,236 名、理系女子が 1,021 名である)であった。

調査の結果から、携帯電話の用途はインターネット利用が中心になってきていることが明らかになっている。携帯電話のインターネット利用方法では「ブログやソーシャルメディア、SNS への書き込み」が前年比 12.8pt 増の 58.0%と大きく割合を伸ばしている。また、携帯電話の利用時間を「通話」「メール」「ネット」に分けてそれぞれ聞いたところ、通話やメールを行う時間は前年比で短くなったがネットに関しては長くなったと結果が出ている。今まではパソコン上で利用が多かったソーシャルメディア、SNS であるがスマートフォンの普及により何時でもどこでもアクセスすることが可能になったことが SNS 利用増加の大きな要因と考えられる。

1.7 ネットワークによる個人の分析

インターネットでの人との繋がりでは友達の友達が自分の友達であったりと、世間は広いようでせまいといった経験を得る事がある。このことについて、安田雪はトラバーズとミルグラムの〈小さな世界の問題〉を解くためにおこなった〈小さな世界の実験〉について紹介している。この〈小さな世界の問題〉とは、アメリカのような大きな母集団の住民から無作為に 2 人の人を選択したとき、その 2 人が互いに知人である確率がどのくらいだろうか、というものである。調査結果ではボストン在住の株式仲買人と、ネブラスカおよびボストンの調査対象者たちは平均して 5.2 段階のステップを踏めば到達することがわかり、アメリカのような広大な国においてさえ、人々は意外に近い関係で相互に連結し合っているという解釈をトラバーズとミルグラムはしている、と紹介している。安田雪はさらに次のように述べている。

「小さな世界の問題」は、日常、われわれがインターネットを用いて何らかの情報を検索したり、人々を探したりする場合にも実感できる。「小さな世界の実験」では郵便がメディアとして用いられていたが、実際にインターネット上で情報を検索していると、思いもかけないステップ数で探索中の情報や人に到達できることがある。(安田 2001:71)

このことから、インターネット上の関係を見ることでその人がどのようなコミュニティ形成を行っているかを見ることができるのである。そして、個人が所属するコミュニティからいかに影響を受けるかについて、次のように述べている。

「取り囲む他者」の力を、なぜこれほど重要視するのでしょうか。その理由は、二つあります。第一に、人や組織の施行や行動に影響を与える力をもった存在としての「ネットワーク」に注目することによって、個々の資源を要因とする「属性主義」から自由になります。「男だから」「女だから」といった、性別や人種、あるいは生まれや家柄といった、属性を過度に重視することがなくなります。その結果、自分自身をはじめ、他人や社会現象に対する解釈のしかたに深みが出るようになります。(安田雪 1997:5)

このように、個人が持つネットワークを分析することで、固定概念を持たずに個人について知ることができるのである。安田は、続けてこう述べている。

ネットワークは、ミクロ・マクロのレベルを問わず存在しています。個人間のパーソナルネットワーク、企業間ネットワーク、産業間ネットワーク、国家間のネットワークなど、さまざまなレベルでネットワークが形成されているのを観察することができます。個人のネットワークであれば、その人が他者とどのような関係を取り結んでいるのかを調べ、彼を取り囲むネットワークを特定します。そして、そのネットワークの構造や、そのなかで彼が占める位置が、彼の行為や思考に影響を与えるメカニズムを追求します。(安田 1997:6)

さらに、次のように続けて述べている。

問題は、個人がどのような「資源や特徴を内面に備えているのかではなく、その人がどのような他者に囲まれているのかなのです。企業について、産業についても、同じように、分析の対象を取り囲むネットワークから見ていきます。ネットワークとは、行為者が相互に織りなす綾です。関係を糸とした、行為者の相互の結びつきです。極論してしまえば、回路であれ、コンピュータであれ、人間であれ、企業であれ、点と線の結びつきに還元して考えてしまうのです。(安田 1997:6)

このように人は置かれた環境によって大きな影響を受ける生き物であり、その関係性を点と線からなるネットワークとしてみることで冷静にその関係性をみつめることができるのである。安田はこのようにも述べている。

人々のもつさまざまな問題を、生まれ・人種・性別や年齢といった、自分で変えることのできない属性のせいであるとする考えは根強く残っています。そのような考え方に対して、「いえ、それは違う。本当はネットワークなのである」という議論が、なぜアメリカで生まれたのか、そしてそれが広く支持されたのかを想像してみてください。それは、ネットワーク分析は、ネットワークを活用して力を増そうといった、戦略的な側面のみを主張したわけではなかったからなのです。むしろ、「人々は社会のなかで、さまざまな人間関係に制約を受けている。その拘束のもとでは、個人がいくら望んでも、努力してもどうしようもないこともあるのだ……」という、いわば、ネットワークのもつ悲しさについて、人々の目を向けさせたのです。これゆえに、ネットワーク分析は、多くの研究者の共感を得たのだと言えると私は考えています。(安田 1997:7)

生まれながらに変えることのできない人種や性別といった属性だけでなく、その人が生まれ持つネットワークがいかに関個人に影響を与えているかについて安田は述べている。

SNS では自由なコミュニティ形成を促進できることから、個人が生まれ持ったネットワークを拡大していくことが可能である。また、このことから SNS は人々の関係性について調査するのに適したサービスであるといえよう。所属するコミュニティが多様なほど個性

が発達するのならば、SNS で持つコミュニティによって個人の自我発達も影響を受けているはずである。では、その自我発達や自己形成、個性の発達などはどういった経緯でつくられていくのか。このことについて次に述べていく。

2 問題定義

富田は、時代とともに消費文化がメタ化してきたことから個人のアイデンティティ形成にもその影響があったと述べている(2009)。そして、現代人のナルシズムは助長されており「より本質的な自分」「個性的な自分」を好む傾向がある。このような現代人にとって SNS は自己呈示をリスクなしに行うことができる絶好の機会であるといえる。しかし、SNS でのコミュニケーションが自我の発達に影響を与えるとは言い難い。なぜなら、〈ジョハリの窓〉の対人関係モデルによれば、自己は自分が他者に明かしていない自分をみせる〈自己開示〉と、他者は気付いているが自分は分かっていない自分の盲点を教えてもらう〈フィードバック〉の二つのプロセスがあって初めて発達させることができるからである(1992)。山本の送り手と受け手の数でコミュニケーションの方向に関する4つの分類でも、送り手は受け手の人数や相手そのものを選択可能である事がわかる(2010)。他者からのフィードバックを求めない自己呈示の場合、ナルシズムの欲求は満たされたとしても自己の発達につながる〈自己開示〉と〈フィードバック〉のプロセスは得られないのである。また、ミード(1934=1973)が言うように個人は所属する社会の他者の態度を一般化し取り入れることで自我を発達させる。また、その所属する社会は多少の闘争状態にあることが好ましく、ジンメルもこのことについて述べている。ジンメル(1890=1998)は、多様なコミュニティを持つことはそれだけ多様な理念をもつことになり、個性の発達に大きな影響を与えると述べている。

以上のことから、個人の自我形成や個性の発達には多種多様なコミュニティを持つ事が大きな要因であると考えられる。また、SNS では自由なコミュニティ形成が可能であり多種多様なコミュニティを持つ個人は自我が発達しており個性的な人間であると言えるのではないだろうか。このことを明らかにするため、次のような調査を行った。

3 調査方法

3.1 調査対象者・時期

同志社大学、関西大学、神戸学院大学、兵庫医療大学、神戸女子大学の5つの大学に在籍する学生を対象に質問紙調査をおこなった。回収数は326票であり、そのうち有効回答数が326票(有効回収率100%)である。また、調査は2012年11月6日～11月22日におこなった。なお、調査票には、調査の趣旨や調査データの使用目的、データから個人は特定されないことなどを明記して調査した。

3.2 調査対象者の属性

性別は、男性125人(38.3%)、女性196人(60.1%)であり、平均年齢は20.9歳(18~30歳)であった。現在の住居形態は、自宅150人(46.0%)、下宿(51.8%)であった。また、現在アルバイトをしている人は239人(73.3%)、していない人は80人(24.5%)であった。

また、SNS を利用している人は 298 人(91.4%)、利用していない人は 26 人(8.0%)、わからないと回答した人は 2 人(0.6%)であった。

3.3 調査内容

調査内容は SNS に関する項目 11 項目、自我に関する項目 49 項目、基本属性に関する項目 8 項目である。SNS に関する項目に関しては、SNS をどのように利用しているかについてと、どのようなサービスを利用しているか、そして SNS でどのようなコミュニティを持っているかについてである。どのようなコミュニティを持っているかについては、安田(2001)のネットワーク分析方法を元にネットワーク密度を算出できるようにしている。この分析方法については以下で詳しく述べる。自我に関する項目については、立木・栗本(1994)の「自我同一性尺度(ego identity scale)」を用いて測定した。この尺度は、49 項目それぞれに得点が高いものから「よくあてはまる」、「ややよくあてはまる」、「どちらでもない」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の回答項目が設けられており、回答した得点を全て足し合わせた合計点が高ければ自我同一性は高く、自我発達しているといえる。基本属性に関する項目は、性別、年齢、学部・学科・回生、スマートフォンの所持に関する質問、アルバイトをしているか、現在の居住形態(下宿、実家)からなる。統計処理には解析ソフト IBM SPSS 20.0 を用いた。

3.4 ネットワーク分析

調査対象者である〈あなた〉を中心に、SNS でどのようなコミュニティを持つかについて調査し、その結果をもとに安田(2001)のネットワーク分析方法からネットワーク密度と平均値、そして分散値を算出した。

安田は、ネットワークについて「複数の何らかの対象があり、その対象の一部またはすべての間に関係が存在している状態」(安田 2001:4)と定義している。また、ネットワークは次の図 5 のようなグラフで表現することができる。

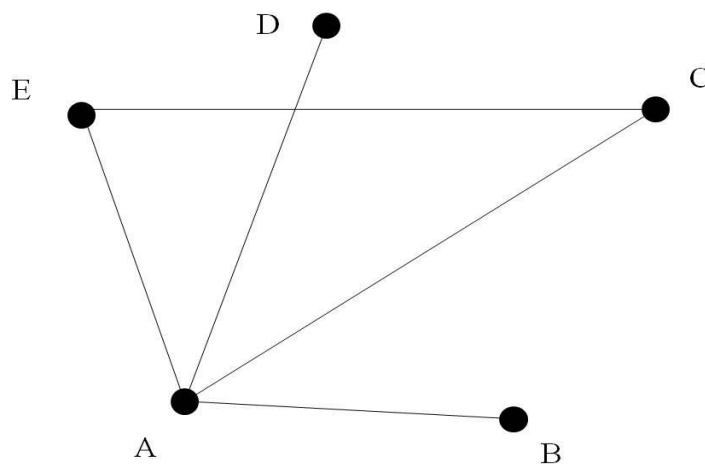


図 5 行為者 5 人、紐帯数 5 本のグラフ

(出典) 安田(2001)をもとに作成

安田は次のように述べている。

グラフは、5本の線つまり紐帯が、それぞれ点Aと点B、点Aと点C、点Aと点D、点Aと点E、そして点Cと点Eを連結しているネットワークを示している。「ネットワーク」という言葉が喚起するイメージは多様であるが、それらに共通する「ネットワーク」の本質を、単純化して記号にすると、どのようなネットワークも点と線からなる「グラフ」として表現できる。グラフ化されたネットワークは、元の状態の情報を失い、関係構造だけを示している。抽象化という作業によって得られたグラフには、それぞれの点が示している行為者が、相反する利害を追及し合う個人なのか、株式を相互保有する企業なのか、同盟関係を維持し合う国家なのかといった情報は現れない。そのため、グラフが表現している「関係の構造」だけを言葉で記述すると、実に単調で味気ない文章になってしまう。しかし、対象が人であっても企業であっても国家であっても、共通して、要素の間に関係構造があることは理解できる。(安田 2001:5)

この点の数は規模として、線の数は活動量として解釈できる。更に、単にネットワークの拡大や膨張がネットワークの発展になるわけではなく、ネットワークの密接度や偏りを見る事でネットワークの多様さを測ることができる。計算は、基本的にこの行為者である点の数と次数の数から算出することができる。

また、今回はSNSの交友関係を測ることから数と幅が人によっては大変膨大なものになる。このことから一定の行為者のグループであるクリークを定め、回答の選択肢としてあげている。クリークとは、行為者の間になんらかの心情的な共感や、集合体としての特殊なアイデンティティが存在することが多いと、安田(2001)は述べている。さらに、安田雪は次のようにも述べている。

クリークは、ネットワーク内において相互に強い直接的関係をもつ行為者の集合と考えることが適切であろう。なぜならば、行為者の「愛情」や「共通関心」あるいは「共通の好み」といった他者に対する肯定的感情や肯定的判断をクリークの成立要件とすると、他者に対する「負の関係」を抽出したネットワークから「クリーク」が抽出できなくなってしまうからである。(安田 2001)

このことを踏まえて、大学生が持つ事が予想されるコミュニティを想定して次の選択肢を設けた。「学校関係(大学、高校、中学、小学校)の友人・知人」、「学校活動以外のボランティア活動で知り合った友人・知人」、「ダブルスクールで知り合った友人・知人」、「インターシップ、就職活動で知り合った友人・知人」、「アルバイト先で知り合った友人・知人」、「ネット上で知り合い、ネット上だけでやりとりする友人・知人」、「ネット上で知り合い、直接会って話したことがある友人・知人」、「ご近所の友人・知人」、「親類・親戚、家族」、「大学生活以外の場で知り合った友人・知人」、「その他」である。また、このクリークどうしに繋がりがある場合にはそのコミュニティ、つまりクリークを線でつないでもらい、調査対象者がどのようなコミュニティ形成しているかを測る。

さらに、この調査で得られたデータからネットワーク密度とネットワークの平均値、分散を算出する。ネットワーク密度とは、ネットワークにおいて行為者同士の関係が、どの

くらい密接であるのか、その程度をあらわすものである。密度は特定のグラフに存在する点と線の数によって決まる。理論的には存在可能な紐帯の数で実際にネットワークに存在する紐帯の数を除して計算をする。計算式は、点 i の持つ次数を n_i とすると、 n 個の点からなるネットワーク密度は式 1 のようになる。

$$\text{network density} = 2 \sum_{i=1}^n (n_i) / n(n-1) \quad \text{式 1}$$

右辺の分母は n 個の点からなるグラフに存在しうる最大の紐帯数を示している。また右辺の分子は、実際に当該グラフに存在する紐帯の数である。次に、グラフの各店の次数の平均値は存在する紐帯数を 2 倍にしたものをグラフ内の数 n で除すことで得られる。計算式は式 2 のようになる。

$$\text{average}(d) = \sum_{i=1}^n (n_i) / n \quad \text{式 2}$$

そして、この算出された平均値を用いて分散とはグラフの点の紐帯数における分散の大きさを計算することができる。この値が高い場合、ネットワーク内で行為者が保持する関係（あるいは行為者の活動量）に大きな差が存在することを示す。計算式は式 3 のようになる。

$$S^2d = \sum_{i=1}^n (d(n_i) - \text{average}(d))^2 \div n \quad \text{式 3}$$

以上の計算により調査対象者の持つコミュニティ同士の紐帯数の偏りを算出した。この算出後のデータと、自我同一性合計点のデータから、次の章では調査結果を分析していく。

4 調査結果と考察

安田によるネットワーク分析の計算方法から導き出したネット内の紐帯数の偏りは、36 人 (11%) の値が-1、276 人 (84.7%) の値が 0、14 人 (4.3%) の値が 1 であるとわかった。

表 1 ネット内の紐帯数の偏り

ネット内の紐帯数の偏り					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	-1.00	36	11.0	11.0	11.0
	.00	276	84.7	84.7	95.7
	1.00	14	4.3	4.3	100.0
	合計	326	100.0	100.0	

また、自我同一性合計点は全体で 100 点から 190 点まで値が分布している。得点の最小値は 105 点、最大値は 186 点である。中央値は 153 点であり、得点の平均点は 151.7 点である。

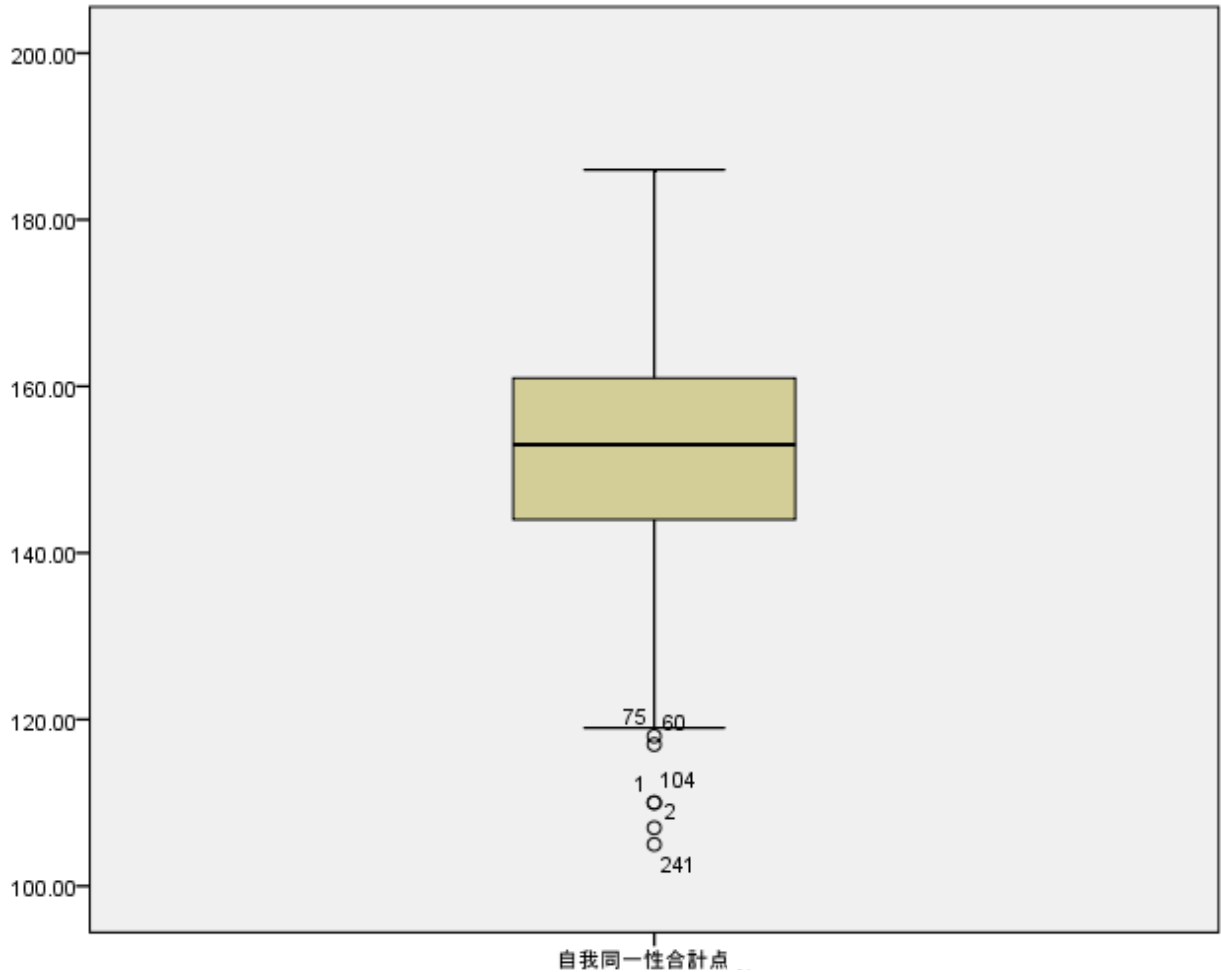


図 6 自我同一性合計点

このことをふまえて図 7 をみてみると、値は中央に偏っており、120~180 点の得点であった人が多くみられる。ネットワーク内の紐帯数に偏りが大きい人とは、図 5 における点 A と点 C と点 E の様な関係である。

調査対象者のコミュニティは常に〈あなた〉を中心としているので、コミュニティとの紐帯は必ず繋がることになる。このことから、密度が高まるには〈あなた〉とコミュニティとの繋がり以外に、〈あなた〉が持つコミュニティどうしが繋がりを持っている必要がある。つまり、調査対象者がコミュニティとコミュニティの橋渡しになっているのである。図 5 を例にして言うと、点 A は点 C と点 E の橋渡しになっている。以上のことから、ネット内の紐帯数の偏りにおいて 1 の値が出ている人はコミュニティとコミュニティを繋げる役割を果たしている人であり、中にはそういったコミュニティどうしのクリークを複数もつ人もいる。

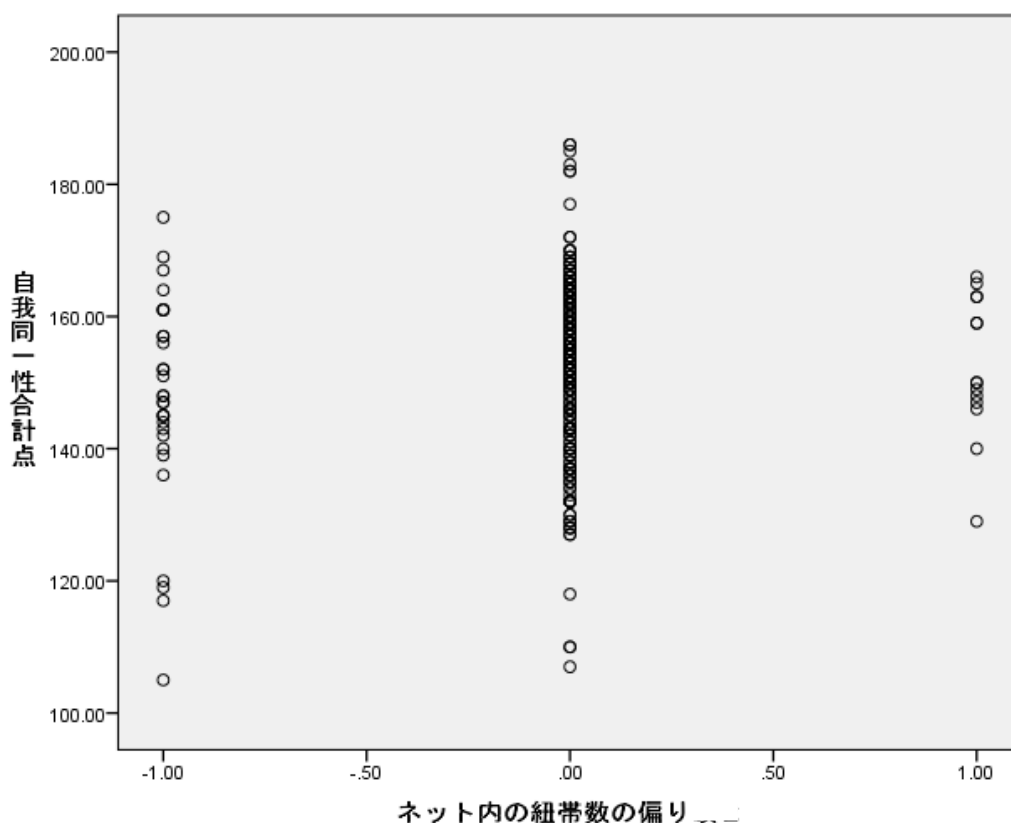


図7 自我同一性合計点とネット内の紐帯数の偏りの散布図

この結果をふまえて、ネット内の紐帯数の偏りと自我同一性合計点の相関をはかるため、表2の分析を行った。表2は、ネット内の紐帯数の偏りと自我同一性の合計点の相関係数である。相関係数は値が.098であり正の値である。このことから、ネット内の紐帯数の偏りと自我同一性合計点の間には相関がみられる。また、有意確率が.089であり、10%水準で傾向があることを示している。

表2 ネット内の紐帯数の偏りと自我同一性合計点の相関係数

		自我同一性合計点
ネット内の紐帯数の偏り	Pearson の相関係数	.098
	有意確率 (両側)	.089
	N	300

個人がもつコミュニティどうしに繋がりがあり、関係が密接である場合、または、そのような密度の高いコミュニティを複数持っていたり、密度の高いコミュニティとそうではないコミュニティを複数持つ人がネット内の紐帯数の偏りの高い人といえる。

このような人は所属するコミュニティごとに〈一般化された他者〉を取り入れていることが予想される。また、コミュニティごとに取り込んだ〈一般化された他者〉を自身の中で統合し統一性のある個人として発達していることから、コミュニティどうしの橋渡しになっていると考えられる。

5 おわりに

ネット内の紐帯数の偏りが高い人ほど、自我同一性の得点が高い傾向がみられたことから、多様なコミュニティを持つ人ほど自我が発達するという仮説を裏付ける結果が得ることができた。先行研究でも述べたとおり、SNSはコミュニケーションを促進・サポートするためのツールである。しかし、今回の研究結果からも述べたいのは、決してツールに頼りきらず個人が〈自己開示〉と〈フィードバック〉のプロセスに参加し、社会的な経験をすることで自我を高めていく事が望ましいということだ。今後、情報通信の技術はさらに高まるだろうが、筆者はこの根本的なコミュニケーションと自我発達の課題を理解してSNSを利用する事が望ましいと思われる。

今回研究していて感じたのは、情報技術が進化することでわれわれの生活様式や社会システムも大きく変化していることだ。また、インターネットを利用することへの認識が〈怖くて得体のしれないもの〉というものから〈繋がることへの安心感、自由なコミュニティ形成〉といったプラスの印象へと変容していると感じた。

また、調査を行ってみて反省したい点は個人がSNSで持つコミュニティについてももう少し詳しく調査したかったという点だ。しかし、先に述べたようにSNSで繋がる人数は人によっては大変膨大な数なので、更に詳しく調査するのなら質問紙調査ではなくインタビュー調査が必要となっただろう。

[参考文献]

- Giddens Anthony, 1992, "The transformation of intimacy : sexuality, love and eroticism in modern societies," *Polity Press*(=1995, 松尾精文・松川昭子訳, 『親密性の変容』, 而立書房.)
- Gerge Herbert Mead, 1934, "Mind,Self and Society." *University of Chicago Press*(=1973, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳, 『精神・自我・社会』, 青木書店.)
- Simmel, George, 1890, "User sociale Differenzierung:Sociologische und Psychologische Untersuchungen," *Ducker & Humblot*(=1998, 居安正訳, 『社会分化論 ; 宗教社会学』, 青木書店.)
- 杉谷陽子, 2007, 「メールはなぜ「話しやすい」のか? : CMC(Computer-Mediated Communication)における自己呈示効力間の上昇」『社会心理学研究』一橋大学大学院社会学研究科 22(3):234-244.
- 土橋臣吾, 2007, 「インターネットの誕生」『デジタルメディア・トレーニング』159-182, 有斐閣.
- 富田英典, 2009, 『インティメイト・ストレンジャー——「匿名性」と「親密性」をめぐる文化社会学的研究』関西大学出版部.
- 柳原光, 1992, 『人間関係トレーニング 私を育てる教育への人間学的アプローチ』株式会社ナカニシヤ出版.
- 山本修一郎, 2010, 『CMCで変わる組織コミュニケーション——企業内SNSの実践から学ぶ』NTT出版株式会社.

山本修一郎・神戸雅一，2010，「CMC が拓く知識流通ネットワーク」『人工知能学会誌』
25(5):715-725.

安田雪，1997，『ネットワーク分析 何が行為を決定するか』新曜社.

安田雪，2001，『実践ネットワーク分析 関係を解く理論と技法』新曜社.

[参考 URL]

株式会社インセンプト，1997-2012，「SNS とは【Social Networking Service】（ソーシャルネットワークサービス）- 意味/解説/説明/定義：IT用語辞典」, IT用語辞典 eWords, (2013年9月10日取得, <http://e-words.jp/w/SNS.html>).

株式会社マイナビ，2012，「2013年卒 マイナビ大学生のライフスタイル調査（携帯・スマートフォン・SNS等の利用状況について）」, マイナビ採用サポネット, (2013年2月14日取得, http://saponet.mynavi.jp/mynavienq/data/mynavienq_20120124.pdf).

SNS利用と自我発達に関する調査

社会学部社会学科

長谷川 由利子

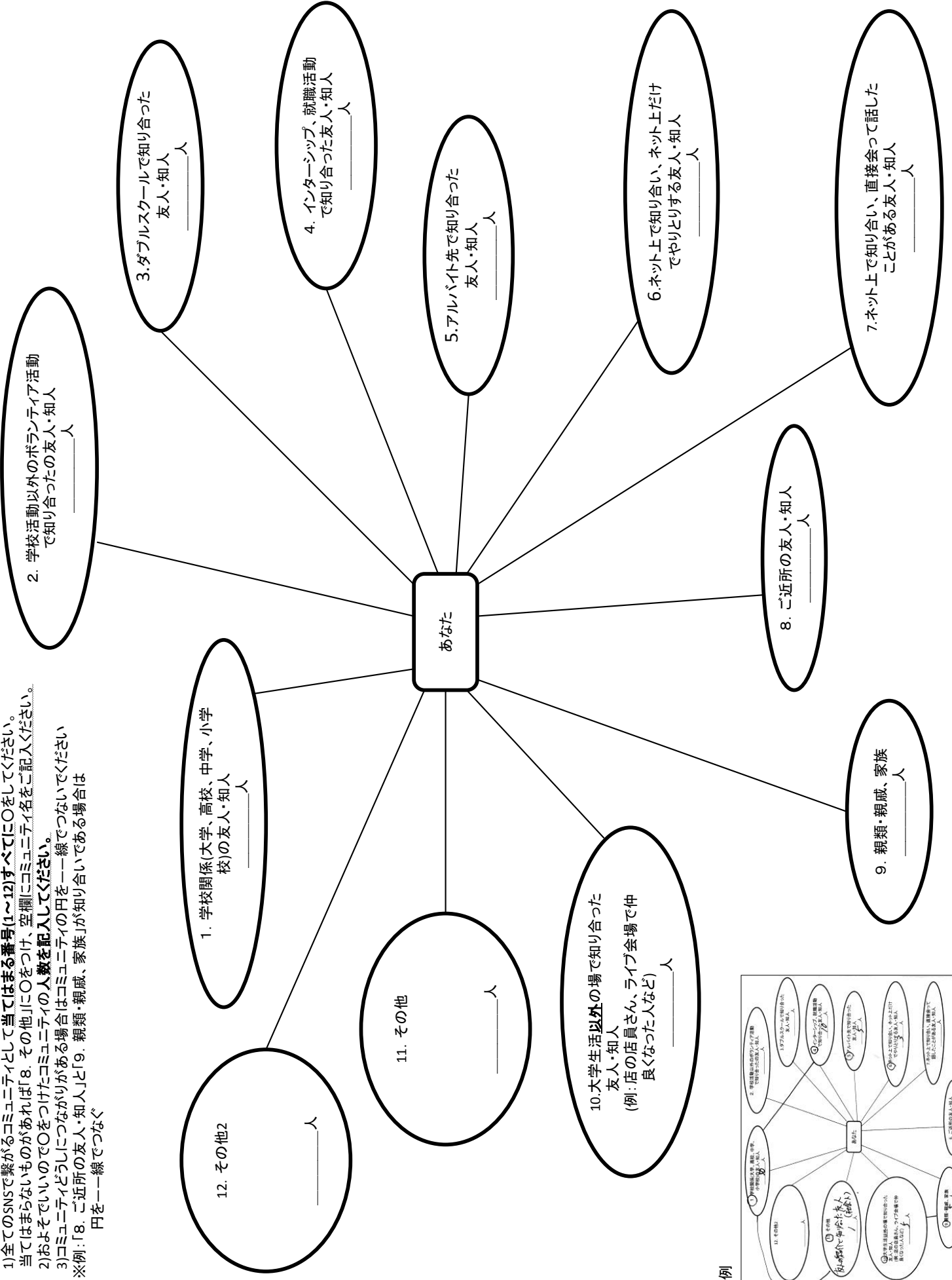
この調査は、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）が個人の自我の発達にどのような影響を与えているかを調査するためのものです。SNSとは、人と人とのコミュニケーションを促進・サポートする Web サービスのことです。（例：Twitter、Facebook など）SNS という新しいコミュニケーションツールが、自我発達に与える影響を明らかにすることで、コミュニティに所属する意義を示すことを目的としています。

- ※ この調査は卒業論文のデータとして扱うことを目的としています。みなさんが SNS をどのように利用しているかについてを 2～5 ページで、みなさんのアイデンティティについて 6～9 ページでお聞きします。
- ※ この調査の結果は統計的に処理されます。お答えいただいた内容について、個人が特定されることはありません。この調査の結果は卒業論文の範囲でのみ使用し、それ以外に使用することはありません。

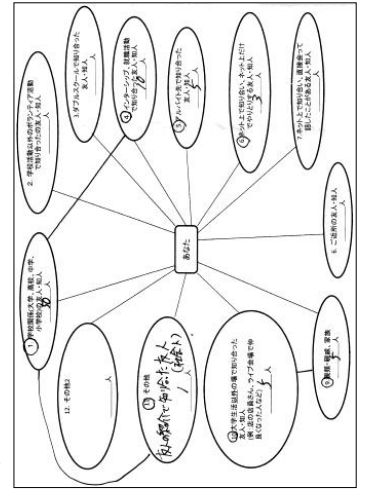
この冊子は表紙を入れて全部で **10 枚**あります。
乱丁・落丁がありましたらお知らせください。

[7] 以下の図はあなたを中心にSNS上で繋がるコミュニティとの関係です。

- 1) 全てのSNSで繋がるコミュニティとして当てはまる番号(1~12)すべてに○をしてください。当てはまらないものがあれば「8. その他」に○をつけ、空欄にコミュニティ名をご記入ください。
 - 2) およそでいいので○をつけたコミュニティの人数を記入してください。
 - 3) コミュニティどうしにつながりがある場合はコミュニティの円を一線ずつないでください
- ※例: 「8. ご近所の友人・知人」と「9. 親類・親戚、家族」が知り合いである場合は円を一線ずつなく



※例



[8]以下の質問について、自分に**最も当てはまる選択肢をひとつ選び**○をしてください。

	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	よくあてはまる
1 私は、自分自身をいつも信頼している	1	2	3	4	5
2 普通、人間はお互いに正直に、かつ誠実に関わり合っているものだ	1	2	3	4	5
3 私は成長し続けて、魅力的な人間になると思う	1	2	3	4	5
4 私は確かな未来に向かって、一步一步進んでいる	1	2	3	4	5
5 自分にとって意味のあるものを手に入れるためには時間がかかるとしてもかまわない	1	2	3	4	5
	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	よくあてはまる
6 私は、自分の考えややり方が他の人と食い違うように思い、自信を失う事が多い	1	2	3	4	5
7 将来の目的のためや、欲しい物を手に入れるために、現在の楽しみを諦めることはいやだ	1	2	3	4	5
8 私は、自分の個性を自由に表現できない生活に埋もれてしまうことが一番いやだ	1	2	3	4	5
9 私は、自分の欲求や衝動をコントロールできる	1	2	3	4	5
10 私はいつも、自分で物事を選択し、決定することに自信を持っている	1	2	3	4	5
	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	よくあてはまる
11 私は、他人とは関係なく、いつも正しい決断を下す事ができる	1	2	3	4	5
12 いったんこうと決めた事について後悔しない	1	2	3	4	5
13 私がこれまで決めたことは、たいてい正しかった	1	2	3	4	5
14 たいていの場合、自分で決めたことは後悔しない	1	2	3	4	5
15 今の自分は、私の人生にとってかけがえのない重要な存在である	1	2	3	4	5

	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	よくあてはまる
16 自分のやっていることは、意味のあることだ	1	2	3	4	5
17 子供は動物のように押さえつけたり、機械のように調整しなければならないと思う	1	2	3	4	5
18 何か重大なことを決めなければならないときには、いつも家族に頼る	1	2	3	4	5
19 物事をうまくやりとおしたいと思っているのに、うまくいかないことが多い	1	2	3	4	5
20 他人は私のことをどう思っているか、といったことがいつも気になる	1	2	3	4	5
	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	よくあてはまる
21 10代の時期にクラブなどの集団活動に参加しなかった人は損をしていると思う	1	2	3	4	5
22 私は、目標を達成するためならどんな困難なことでもやり通すことができる	1	2	3	4	5
23 私は、人間は、価値と言う点では平等だと信じている	1	2	3	4	5
24 私は、他の人が悪い事をしようとしているところを見つけた時には、それを絶対に許すことができない	1	2	3	4	5
25 私はいつも何かに追われているのに、空回りばかりでうまく前に進んでいけないように思う	1	2	3	4	5
	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	よくあてはまる
26 私は、子供の頃の失敗や、将来の不安ばかり考え、現在の生活にやる気がなくなってしまう	1	2	3	4	5
27 私の生きがいのよりどころは、仲間や仕事(勉強)、芸術的な創造にある	1	2	3	4	5
28 私は、自分が何かに役立っていると感じる	1	2	3	4	5
29 落ち込んだり困ったりしている人を元気づけたり慰めたり相談に乗ったりすることは非常によいことだと思う	1	2	3	4	5
30 一つのことに集中するのは、難しいことではない	1	2	3	4	5

	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	よくあてはまる
31 私は仕事の出来栄え(成績)が他の人のそれと比較されるなら頑張ろうと思う	1	2	3	4	5
32 私にしてみればうまく課題をこなせた時でも、他の人はそれを理解したり認めてくれたりしないような気がする	1	2	3	4	5
33 私は他の人ほどうまくチャンスをつかめないような気がする	1	2	3	4	5
34 私は人と話すとき、相手をからかったり余計な口出しをしたりしないと、どうもうまく話せないように思う	1	2	3	4	5
35 いろいろな生き方があるということが、よくわからない	1	2	3	4	5
	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	よくあてはまる
36 私の生き方は、心から納得できるものである	1	2	3	4	5
37 私は現在自分が進んでいる道にかなり満足している	1	2	3	4	5
38 私は現実の生活の中に生きがいを見出して、それを発達させている	1	2	3	4	5
39 これまでに見につけたやり方や考えを、これからの自分にどう結び付けたいのかかわからない	1	2	3	4	5
40 私は「理想の自分」がたくさんあって、どれが本当に「なりたいたい自分」なのかかわからない	1	2	3	4	5
	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	よくあてはまる
41 私は、自分自身のことがよくわからなくなっている	1	2	3	4	5
42 私は自分の人生で、一体本当に何がしたいのかよくわからない	1	2	3	4	5
43 私は飲み会などで、他の人たちをなごませ、楽しませることが出来る	1	2	3	4	5
44 私は他の人たちと親密な関係を持つことができる	1	2	3	4	5
45 私は他の人にとって、とても話しかけたり、相談しやすい人間のように、自分でもそう思う	1	2	3	4	5

	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	よくあてはまる
46 他人とは気楽にうまくやっていかなければならないと思うが、必要以上に親しくなることもないと思う	1	2	3	4	5
47 私は、絶対に自分の感情を人に知られたくない	1	2	3	4	5
48 一緒に活動してきた人で、たとえ好意をもっている、その人の本質を本当に知ることはないと思う	1	2	3	4	5
49 私は、自分さえよければ、あとはどうでもいいと思う	1	2	3	4	5

[9]あなたの性別を教えてください。

1. 男 2. 女

[10]あなたの年齢を教えてください。

[]歳

[11]あなたの学部学科を教えてください。

[]学部 []学科

[12]あなたはスマートフォンを持っていますか。

1. はい 2. いいえ

[13] [12]で「**1. はい**」と答えた方にお聞きします。

①スマートフォン購入前から SNS を利用していますか。

1. はい 2. いいえ

②スマートフォン購入後に SNS の利用頻度に変化はありましたか。 当てはまるものひとつに○をしてください。

1. 増えた 2. 減った 3. 変わらない

[14]あなたは今現在、アルバイトをされていますか。

1. はい 2. いいえ

[15]あなたは下宿されていますか。または、実家で暮らしていますか。

1. 下宿 2. 実家

質問は以上です。記入漏れがないかももう一度ご確認ください。

ご協力ありがとうございました。